文化財に活きる高岡の力

「再生の技のまち 高岡」

修復された高岡御車山の「一番街通」の車輪。桐、鳳凰、梅鉢、半菊花の金工品が散りばめられた豪華なもの。

全国のさまざまなまちで、先人から受け継がれる祭り屋台や山車。また、人々の願いをこめて建立される像やパブリックアート。まちの誇りであり、シンボルでもあるそれらの文化財は、時間とともに、あるいは使用されるごとに傷んでいく宿命にある。そして、修理する職人も少なくなっている現状がある。優れた技術を継承し、多くの技術者を擁する高岡では、その力を全国の文化財の修理に活用してもらおうと動き出している。

認められた第一級の技術力

その部屋には、一切の雑音がない。数人の技術者が、もくもくと手を動かしている。大きな車輪が並べられ、漆の工程が施されている。

ここは、高岡地域地場産業センターの1階にある「文化財修理工房」。毎年五月一日に市内を巡行する「高岡御車山」のうち、「一番街通」の車輪を修理しているのである。

高岡御車山祭は、約400年前、高岡開町の祖、前田利長公が、町民に山車を与えたことが始まりと伝えられる由緒ある祭りである。また、御車山には、高岡の金工・漆工などの技が結集されており、先人の技の高さがうかがえる。

国の重要有形無形民俗文化財に指定されているため、その修理は、「祭屋台等製作修理技術者」として登録された技術者が行う必要がある。

高岡市では、金工・漆工あわせて9名のほか、その他の分野でも木工・繊維で4名の技術者が登録されており、地元で修復作業を行うことができる。平成19年度には、二番町の車輪を修復した。

この高い技術力を、全国の文化財などの修理に活かしたいと発足したのが、「高岡地域文化財等修理協会」である。

修理とは、新しくしないこと

修理協会は、重要無形文化財保持者（人間国宝）の大澤光民さんを会長に、金工部会、漆工部会、繊維部会、木工部会の4つの部会を組織し、現在54名の会員がいる。

全国の山車や鉾を持つまちは、ほぼ同じ悩みを持っている。「祭りをどう守っていくか」「修理する職人がいない」。文化の継承と、技術の継承の問題である。

金工部会会長の鳥田稔弘さんは、「高岡の技法は、非常に高度なもの。力のある職人がおり、技術が途切れていない。それを活かしていきたい」と語る。

鳥田稔弘（宗吾）さん
色金重ね高肉象嵌の第一人者。高岡市伝統工芸産業技術保持者。伝統工芸士。「現代の名工」表彰。

毎年5月1日に行われる「高岡御車山祭」。関野神社の春季例大祭に、それぞれに技を凝らした7基の御車山が、市内を巡行する。右の写真は、勢揃い。左は、今回車輪を修復した一番街通の御車山。

宮下 勉（芳洋）さん
塗り・蒔絵。高岡市伝統工芸産業技術保持者。日本工芸会正会員。

（左）漆工の作業風景。

また、修理とは、技術だけではなく考え方も重要であるという。

「文化財の修理は、元の形に戻すことが大前提。新しくするのではなく、本来の姿に返すこと。そこに自分の考えを入れてはいけないんです」と話す。

100年後を考えた仕事

一番街通の車輪の修理では、金具を外し、金工と漆工を別に行った。漆工は、工房で作業を行い、傷んだところを修理し、塗りと研ぎを繰り返す。

漆工部会会長の宮下勉さんは、「修理をすると、昔の職人の仕事がわかる。自分たちが習ったことは正しかったんだと感じますね」と、語る。「いい仕事をしてある。心は伝わりますよ」。

高岡の漆職人として、同じ技を継承してきた。そのことを実感するという。

また、山車や屋台は、部品でも大きなものが多い。工程も数多くある。

「だから、チームワークがないとできない。それと、修理工房が整備されていることも大きいですね」

漆工の工程が終了し、金具が取り付けられた。今回は、四輪のうち二輪が修理された。

鳥田さんは、「修理していないものとのバランスを取りながら、表現していくことが大事」と、語る。

宮下さんは。「これ以上はない、という仕事をして納める。100年後のことを考えた仕事ですね」と、言う。何百年も持つように。それが、高岡の匠たちの誇りなのである。

金工の作業風景。すべての金具を取り付け、最終のチェックを行っている。

ブロンズ像やアートも再生へ

高岡の技でよみがえるのは、祭りの山車や屋台ばかりではない。世界一のブロンズ鋳造の町である高岡は、ブロンズ再生のまちでもある。

例えば、長崎にある平和祈念像（北村西望作）は、被爆10周年にあたる昭和30年に完成した。40年以上の歳月が経ち、傷みが激しくなったため、平成12年に平成の大改修が行われている。

高さ9・7メートル、重量30トンの像を、頭部、腕部、胸部など104のパーツに分けて取り外し、補修作業を行い、着色・仕上げを施した。

また、高岡市にある高岡大仏は、昭和8年に開眼した高岡のシンボルだが、昭和56年の大修理、平成19年の修理と、何度も修理が行われている。

屋外に設置され、人々の心の拠り所となっている大型モニュメントは、風雨などの厳しい自然環境にさらされている。それら大がかりなものから、町並みのパブリックアートに至るまで、高岡の技は、多くの像を修理してきた。そこには、先人から受け継いだノウハウがあるという。また、絶え間ない技術開発がある。

文化財は、長い時を超えて、世代から世代へ受け継がれてきた。その時間のなかで、必ず「時間を巻き戻す」ことが必要となる。それが、文化財修理だといえる。

高岡の技術者・職人たちは、修理・再生の技を今も受け継ぎ、高めている。

「文化財修理のまち高岡」「再生の技のまち高岡」。それが、高岡のもうひとつの新しい顔である。

高岡大仏
高岡銅器製造技術の粋を集め、30年の歳月をかけて完成した。総高15.85m、重量65tのスケールを誇り、歴史の上で奈良、鎌倉につぐ日本3大仏に数えられる。

［問合せ・申込み］

高岡地域文化財等修理協会

■事業内容　文化財修理メンテナンス・県内外の山車の修理メンテナンス
■会員数　54名（会長／大澤光民、副会長／鳥田稔弘、宮下勉、上野伸、山本博史）
■事務局　財団法人高岡地域地場産業センター
高岡市開発本町1-1　TEL.0766-25-8283 FAX 0766-26-7323

●詳しくはホームページをご覧ください　http://www.takaoka-waza.jp/